

榮光

759号

2025年3・4月

日本基督教団
田園調布教会
伝道部発行

〒145-0071

東京都大田区田園調布
3-34-18

電話 03-3721-2811

FAX 03-3721-2814

<https://den-church.jp/>

人は何もののなので

詩編八編一〇節
ルカによる福音書一七章二一〜一九節

牧師 高橋和人

今日は特別伝道礼拝として礼拝を守ります。しかし、特別なことはしませんでした。それはコロナ後だとか時間的な制約もありましたが、わたしは礼拝はいつでも伝道礼拝になること、そして説教も伝道説教となるようにと教えられました。

実際、コロナ禍にあつてもこれまでの伝道の企画ができない中でも、礼拝だけで、受洗者が与えられてきました。

さて、今日いつもと違うのは私自身のことを語ることにしたことです。これまで、説教では御言葉が語られるべきで、自分のことは盛り込まないように意識してきました。

自分のことはどこかで正当化してしまう誘惑があります。しかし、それでもここまでの歩みは、神様なしには考えることができませんので、不十分な証しとして受け止めていただき、そこにも御手が伸べられたこととして

聞いていただきたいと思えます。

さて、わたしは奥深い自然豊かな川沿いに開けた山里で生まれました。そこは圧倒的被害世界を感じさせます。早春の燃え立つような生命感、川岸はカタクリの花で絨毯のように埋め尽くされ、田のあぜには大きな水芭蕉が咲きます。冬は三メートルを超える積雪、春といえは春、冬といえは冬というように四季の輪郭がくつきりしていました。それは超越したものの存在を教えているようでした。子どもの頃から、聖書の創造物語を知っていましたので、創世記の神の存在を示すようでした。一方で死も身近でした。目の前の川で兄の同級生の事故、村に入る雪道を徒歩で魚を運んでくる魚屋さんの雪崩での遭難も聞いていました。家畜も死を迎えます。そのような中でわたしは小さく、病弱に生まれました。母の実家で生まれたのですがその家は大

変大きく、四百年の歴史があり、長押には檜や火縄銃が掛けてあり、水車小屋、薪小屋、農具小屋、米蔵と物語の潜むような家でした。本があり居心地が良かったです。怖いのは仏間があつて、そこに先祖たちの遺影がかけられていたことでした。死と自然がどこかで結ばれる世界でした。

そこから、東北の中心の仙台に移りました。急に町が発展膨張した時代で一学年三百名以上の大きな学校に移りましたが、そこでも最も背が低かった。圧倒的な小ささと体力のなさ、病気がちなので、病院と学校に半分ずつ通いました。体育はほとんど見学で、走れば必ず一番最後になりました。

ですから、普通の子のところには、はるかに及びません。男の子で運動が全くできないのは居場所のない思いがします。友だちもいましたし、自分ではそれなりに学校を楽しんでいました。しかし、忘れ物は多く、宿題も半端で、普通ではありませんでした。その代わり、体育の見学の時は図書館で本を読んでよいことになっていましたので、よく読みました。家でも百科事典と童話、特に児童文学には目立たない自分が冒険をするような話は多いので、無理に自分を重ねて読む楽しみがありました。寝ながらの読書と手先のことは上達しました。折り紙もよく覚えました。いつも、微熱とどの痛みがありました。

今日はルカによる福音書を読んでもらいましたが、そこに重い皮膚病の患者が登場します。今はハンセン病と言われる病気とは直接同じではないということで重い皮膚病と訳さ